

家 庭

エルサルバドル郊外・ネハパ市に向かうバスに乗り込んだ。車内では、いつも左側に席を取る。バスは車体をガタガタと揺らしながら走る。1時間ほどすると、民家を通り過ぎて開けた場所に出た。

無限に広がっている。空一面に黒ゴマをぶったような光景が迫ってくる。停留所はない。下車する地点は、その黒ゴマを目安に、自分で判断するのだ。目を凝らしていると、空に散らばった黒い点は、数え切れないくらい鳥の姿であることがわかってくる。



宇田 有三



空の向こうに何がある？—エルサルバドルで

無限の青空 舞う鳥を目安に

まる。「行くか、戻るか」。一瞬、ちゅうちよする。1週間近く通って慣れているはずなのに、このためらいは何なのだろう。バスの天井を思いつきり手でたたく。「アキ！（ここで！）」。運転手に降りる合図をする。

人目を避けるように脇道を歩く。くるぶしまで厚手の革で覆われた靴は、白い土ぼこりを舞い上げる。ちよっと立ち止まり、靴のひもを締め直す。同時に、緩んだ心をギュッと引き締める。今日は現場には入らず、空に舞う鳥のように、この現状を俯瞰してみよう。

「ごみ捨て場で働く人びと」。そのイメージに、多くの人はフィリピンを重ねる。だが、地球の反対側の地にも、同じ状況がある。10年近い歳月、変わらぬ光景を目にしてきた。その背景に何があるのか。再び、空を見上げる。鳥に答えを求めても、もちろん答ええてくれない。

(フォトジャーナリスト)